

宝物になった備前刀 — 奉納刀剣、名物刀剣、注文打 —

講師 佐藤 寛介

独立行政法人 国立文化財機構 東京国立博物館
学芸企画部企画課特別展室 室長



「宝物になった備前刀 — 奉納刀剣、名物刀剣、注文打 —」

独立行政法人 国立文化財機構 東京国立博物館

学芸企画部企画課特別展室 室長

佐藤 寛介

はじめに

ご紹介いただきました、東京国立博物館の佐藤寛介と申します。本日は「^{たからもの}宝物になった^{びぜんとう}備前刀 —^{ほうのうとうけん}奉納刀剣、^{めいぶつとうけん}名物刀剣、^{ちゅうもんうち}注文打—」というタイトルで、私が日本刀を通して学んだこと、感じたこと、考えたこと、そういったお話をさせていただきます。この講演を聞いていただいて、皆さんが日本刀って素晴らしいな、備前刀って誇らしいなと感じてもらえるような話ができればと思いますので、よろしく申し上げます。

それでは早速、内容に入ってまいりたいと思います。お手元に配布資料を用意させていただいております。このテキストが、私が今日お話ししたいエッセンスになります。それでは、はじめに日本刀の特質ということで、そもそものお話をいたします。

(1) 日本刀は生殺与奪の武器として本質的な「切る」という機能を極限まで追求した存在

一つ目、日本刀は生殺与奪の武器として本質的な「切る」という機能を極限まで追求した存在です。当たり前といえば当たり前ですけど、結構大事なところですよ。生殺与奪というところがポイントですね。単に奪う、敵を倒すではなく、身を守る、命を守る、そういう武器であるということです。そしてその武器として本質的で最も重要な「切る」という機能を極限まで追求した存在ということですね。

(2) 極限まで機能を追求したものには「機能美」が備わり、機能美から「靈性」が生まれる

次に二つ目、極限まで機能を追求したものには、機能美が備わります。これは刀剣に限らず、あらゆるものがそうですね。速さを追求したもの、力を追求したもの、そういったもの

には、独自の美しさが備わります。ものだけではなくて、人間でもそうですね。例えばアスリート、鍛えられた肉体は美しいものです。ものも同じで、極限まで機能を追求したものには機能美が備わります。そしてその美の中に、抽象的ないい方になりますけど、霊性が生まれると考えています。

(3) 刀剣研磨によって日本刀の美的な要素（刃文、地鉄）が引き出され、霊性がより高まる

そして三つ目ですが、ご存知のように日本刀は研磨によって全体が磨かれます。しかし実は武器としては全体を研ぐ必要はありません。刃先だけ研げば、切るということだけ考えるならば問題ないわけで、じゃあ、なんで全体を研ぐのかというと、日本刀の美的な要素、^は刃文とか、^{もん}地鉄と呼ばれる日本刀の美的な要素を引き出すために、全体を研磨するのです。これによりさらに機能美が引き出され、そこに備わる霊性も高まるわけですね。

(4) 卓越した機能美と霊性をもつ「名刀」には人智を超えた霊威が宿り、崇拝の対象、権力の象徴となる

さらに四つ目、卓越した機能、そして霊性を持つ、いわゆる名刀と呼ばれるものには、人智を超えた測り知れない霊威ともいべき不思議な力、そういったものが宿り、ものでありながら崇拝の対象や権力の象徴となるわけです。

(5) 霊威を宿した名刀は、時代を超えて人々に受け継がれ、伝承や由緒をつむぎ、まとい、「宝物」となる

最後に五つ目、その霊威を宿した名刀というのは、時代を超えて人々に受け継がれてきます。今の我々が見てもすごいな、素晴らしいなと思うものには、昔の人も同じようなことを感じているわけです。だから今に伝わっている、残っているわけです。これは結構エモい話ですね。名刀というのは時代を超えて人々に受け継がれることで、そこから伝承とか由緒とか物語が紡がれます。それらを名刀はまとい、備えて、宝物になるのです。

1 宝物になった日本刀

では、具体的に宝物になった日本刀ということで、五つほど代表的な事例を紹介したいと思います。

(1) 国宝、重要文化財の刀剣

一つ目、国宝・重要文化財の刀剣です。これはわかりやすいですね。国宝・重要文化財というのは文化財保護法という法律が拠りどころです。文化財保護法に基づき国が指定した歴史的、芸術的、学術的に価値の高い刀剣ということです。現在、国宝の刀剣は111口ございます。そのうち瀬戸内市周辺で作られた備前刀が47口ございます。割合にしたら40%ぐらいになります。そして重要文化財の刀剣は810口ございます。そのうち備前刀は336口ということで、これもだいたい40%になります。ですから、国宝・重要文化財を合わせても日本刀の中で備前刀が占める割合は約40%。これは圧倒的なナンバーワンです。全国各地の刀剣産地の中で断トツのナンバーワンです。それだけ質量ともに圧倒的な日本最大の刀剣産地だったということです。

(2) 御剣（皇室の刀剣）

二つ目、御剣。皇室の刀剣ですね。皇室、天皇家に伝来する御由緒物は縮めて「ごぶつ」とか「ぎよぶつ」といいます。御物の刀剣、すなわち御剣は宮内庁の管轄となっております。一方で、皇室から国に移管された御物については、旧御物と通称しております。その旧御物の刀剣は東京国立博物館や皇居にあります皇居三の丸尚蔵館に所蔵されています。

この御剣の中でも皇室に今も伝わる御由緒物の刀剣を一口紹介したいと思います。「太刀銘 備前国友成（鶯丸）」という名が付いている刀剣です。平安時代・11～12世紀の作で、備前国で刀剣づくりが本格的に始まって最初期の刀工である古備前といわれる刀工たちの代表格、友成の作です。その友成の作の中でも最古級に位置付けられるのが本品で、鶯丸という名の由来ははっきりとは分からないのですが、ウグイスというのは春を呼ぶといひましようか、春の訪れのところに鳴き始めますよね。ですから非常に縁起が良い鳥です。その縁起の良さ、吉祥のシンボルということで、この太刀の名にふさわしいということで名付け

られたのではないかと私は思っております。刀身は細身で腰反りといひまして、手元辺りからグッと反る。そして鋒は小鋒で、まさに平安貴族好みの優美な太刀姿です。

そしてこれがすごいと思うのですが、茎、柄に収まる部分が生なのです。目釘孔が1個だけ。ここに備前国友成と銘が刻まれているのですが、生の作られた当時のままの茎ということは、要するに作られた当初の姿をほぼ維持しているということで、いかに大事にされていたか、伝えられてきたかということが分かります。この鶯丸は足利將軍家伝来で、結城合戦（1440年）の恩賞で信濃守護の小笠原政康が拝領して小笠原家に伝来し、その後、刀剣を好まれた明治天皇に献上されて、今も皇室に伝わるという由緒を持っております。

実は、御物は国宝とか重要文化財にならないのです。素晴らしい国宝級のものばかりですが、皇室のものは法律の枠外ということで、国宝・重要文化財の対象外です。一方で、皇室から国に移管された旧御物はなります。一例として、国宝「太刀 銘 備前国長船住景光（小龍景光）」を紹介します。鎌倉時代後期・14世紀の初め頃に活躍した備前長船の名工景光の代表作です。手元に小さな龍の彫り物があります。剣に絡みついて、鋒を龍が啜えている、そういう彫刻があるのですね。不動明王の化身である俱利伽羅龍王を表しているのですが、これが由来で小龍景光という名が付いております。

この太刀は、南北朝時代の名将楠正成が持っていたと伝わります。その後、由緒が不明になるのですが、江戸時代の終わり頃になって、彦根藩主の伊井家あるいは試し斬りの家柄の山田家が所持していたことがわかっています。そして明治維新後に明治天皇に献上されたという由緒があります。



太刀 銘 備前国長船住景光（小龍景光） 出典：ColBase (<https://colbase.nich.go.jp/>)

(3) 御神体の刀剣、奉納刀剣^{ほうのう}

次に三つ目、御神体の刀剣、奉納刀剣です。こちらは神様そのものの刀剣、あるいは神霊に捧げられた刀剣ということで、これは世界の刀剣文化の中でも極めて特異な存在です。西洋、中国にも当然刀剣はありますが、権力者の象徴になることはあっても、刀剣が神になるとか、刀剣を神に捧げるという文化はないですね。日本だけの独自の文化であり、これがまさに日本刀が単なる武器ではないということをよく示していると考えております。

その中でも特にご神体、神そのものの刀剣ということで、これは神霊の依代^{よりしろ}として信仰の対象となる神聖な存在ですね。代表的なものとして天叢雲^{あめのむらくものつるぎ}剣、草薙^{くさなぎ}剣ともいいますが、愛知県名古屋市の熱田^{あつたじんぐう}神宮に祀られております。スサノオノミコトが、八岐大蛇^{やまたのおろち}を退治した時に尻尾から出てきた刀剣ですね。アマテラスに献上され、天孫降臨の際に地上に降りてきた、そういうものです。ヤマトタケルがこの剣でもって草を薙ぎ払って難を逃れたということから草薙^{くさなぎ}剣と名を変えたという伝承があり、その後、熱田神宮に祀られたということで、今も宮中深くに祀られているというものです。もう一つが、「布津御魂^{ふつのみたまのつるぎ}剣」。これは奈良県天理市^{いそのかみじんぐう}の石上神宮の御神体ですが、神話によるとタケミカヅチが葦原中国^{あしはらのなかつくに}を平定した時に用いられ、神武の東征を助け、そして石上神宮に祀られたという伝承があります。

そして、奉納刀剣。これは人々の祈りや願いを込めた器、神の器として作られたものです。ですので、武器としては未使用というのが原則です。つまり、人を切ったりして血がついたもの、いわゆるケガレのついたものは、神に捧げるものには不敬ということで、奉納刀剣というのは武器としては未使用、できたてのものが奉納されるというのが原則となっております。ただし、武器として使えるように作っています。そうでなければ意味がないというか、形だけのものになってしまうので、鍛えられた地鉄に刃文を焼入れた、きちんと武器として使えるものを未使用で奉納するというのが原則ということですね。

(4) 名物刀剣^{めいぶつ}

そして四つ目、名物刀剣です。名物刀剣というのは、広い意味では、優れた造形や伝承、由緒に基づく固有の名を与えられた刀剣です。つまり、名を与えられることで、人ではないのですが、人格が与えられるわけですね。単なるものではなくなるということです。唯一無

二のオンリーワンの存在になるということですね。

そして狭い意味では、刀剣鑑定を家職とする本阿弥家^{ほんあみ}が江戸時代にまとめた「享保^{きょうほう}名物帳^{めいぶつちょう}」に掲載された刀剣です。この本阿弥家は、室町将軍家、そして信長・秀吉・家康といった天下人、そして徳川将軍家などに刀剣鑑定や研磨で仕えた家柄で、その本阿弥家の鑑定というのは権威があるわけですね。その本阿弥家が将軍徳川吉宗の指示により優れた刀剣をまとめたのが享保名物帳だといわれています。

ここに掲載されている 270 口前後の刀剣のことを狭い意味での名物刀剣と呼んでおりまして、これらは固有の名前がそれぞれ付いているのですが、その前に名物という冠を付けて、例えば「名物大包平^{おおかねひら}」というふうに使われています。そして、この名物刀剣の大事なところは、将軍家や大名家など高位の武将が所持し、武家の歴史と権威の象徴として継承され、贈答儀礼、目下のものから目上の方に贈る献上、目上の人から目下の人に贈る下賜、そういった贈答儀礼に用いられたということで、これも日本刀が単なる武器ではないということをよく表しています。武家の歴史と権威であり、そして贈答儀礼と密接に結びついているのが名物刀剣ということです。

(5) 注文打

最後の五つ目、注文打です。これは為打^{なめうち}ともいい、武将の依頼により特注品として製作された刀剣のことです。いわゆる普通の品、量産品のこと、注文打に対して数打などといいますが、それらと比べると美術刀剣として圧倒的に優れております。特注品ですからね。そして同時に注文打は茎の銘文の情報量が圧倒的に多いのです。作者の名前と製作年月日、だいたいそれが普通なのですが、さらに製作地や誰のために作ったか、何のために作ったか、そういったいろんな情報が茎の銘文に示されています。それを読み解いていくことで、歴史資料としても重要な手がかりになるわけです。そして、注文打というのは戦国時代の備前刀に多く見られます。

宝物になった日本刀ということで、先ほどまで五つの事例を挙げて紹介しましたけれども、今日はその中から備前刀でよく見られる奉納刀剣、名物刀剣、そして注文打について、さらに個々の刀剣を見ながら、その特質をお話していきたいと思います。

2 奉納刀剣の備前刀

(1) 国宝「太刀 無銘（名物 日光一文字）」鎌倉時代・13世紀 福岡市博物館蔵

まず、奉納刀剣の備前刀ということで一つ目、国宝「太刀 無銘（名物 日光一文字）」です。今回は奉納刀剣に入っていますが、国宝であり、そして名物日光一文字という名が付いている通り、享保名物帳に掲載されている名物刀剣です。名前に一文字とあるように、備前刀の中でも鎌倉時代に隆盛した福岡一文字派の作と考えられます。それは刀身ががっしりとして力強い姿をしている。そして非常に華やかで変化に富んだ刃文である。こうした総合的な作風から一文字派の作であろうと考えられるわけですね。ただ、茎のところに作者を示す銘文がなく、無銘となっています。そして日光一文字の名の由来、この日光とはなんぞやといいますと、栃木県の日光権現、今は日光二荒山神社と呼ばれていますが、その日光権現に奉納されていた奉納刀剣であったと伝えられます。実は、奉納刀剣や献上のための刀剣には、銘がそもそもない無銘のものがあるのです。つまり、目上の神に捧げる刀剣とか身分の高い方に納める刀剣というのは、作り手が憚って銘を入れない場合があります。この日光一文字もその類ではないかと考えられます。

日光権現の奉納刀剣であったこの太刀ですが、戦国武将の先駆けなどといわれ、小田原北条氏の祖となった北条早雲が日光権現から譲り受けたという伝承があります。その後、小田原北条氏に受け継がれ、天正18年（1590）に豊臣秀吉が小田原北条氏を攻め滅ぼした「小田原征討」の時、和平の仲介をした秀吉の軍師である黒田孝高に、北条氏直から感謝の気持ちとして譲られ、そして江戸時代を通じて福岡藩主黒田家の重宝として伝わりました。

(2) 国宝「太刀 銘 助真（日光助真）」鎌倉時代・13世紀 日光東照宮蔵

次に、奉納刀剣の備前刀の二つ目、国宝「太刀 銘 助真（日光助真）」です。助真拵と呼ばれる黒漆打刀が付属しています。助真は先ほどお話しした福岡一文字派の代表的な名工の一人です。一文字派の中でもさらに一段激しい作風で知られる刀工で、その代表作が日光助真です。ゴリっとした力強い刀身に非常に華やかな刃文を焼入れており、茎の先の方に助真の銘があります。

実は本品は、作られた当初はもっと長かったのです。茎の先がもっと続いていたのを、途

中で切り落しています。打刀として使いやすいよう刀身を短くするために、茎を切り詰めて、刀身だった部分を茎に仕立て直しているのです。これを磨上げといい、戦国武将たちがよくやるのですが、本品もその一例です。ただし、助真の銘は大事なので切り落とさずに残しているということです。

この日光助真ですが、福岡一文字派の名工助真の代表作であり、加藤清正から徳川家康に献上され、家康の愛刀として大事にされたというものです。そして家康の没後、日光東照宮に御神宝として奉納されています。

付属する黒漆打刀は助真拵ともいわれ、まさに家康が実際に使っていた時にあつらえた家康好みの拵です。鞘は黒漆塗り、そして柄も黒鮫に黒糸の柄巻という、黒を基調にした一見非常に地味な拵ですが、刀装具や全体の仕立ては非常に精度が高い高級品です。つまり、華美を抑えた実用本位でクオリティが高いというお品でして、まさに徳川家康という人の人柄とか好みか形になっているといえます。

そしてこの助真拵に収められた日光助真も家康好みの刀剣であったわけですが、ポイントは戦国時代の武将たちは、戦国時代に作られた当時の現代刀ではなく、平安時代とか鎌倉時代とか南北朝時代といった古い時代の刀剣に価値を見出していたということです。多分、武器としては当時の現代刀の方が使い勝手がよかったはずなのです。それなのに、あえて古い時代の騎馬戦で戦っていた頃の刀剣を戦国時代に使うということの意味が重要です。

つまり、武器としての機能性よりも、自分は古い名刀を持つことができる立場である、家柄である、歴史がある、そういうことをPRするために、身分の高い武将、腕に覚えのある武将というのは、あえて当時の現代刀ではなくて、古い時代の名刀を欲しがったのです。特に名物と呼ばれる由来や伝承を持つ刀を求めました。それは、自分がそういった名刀を腰に手挟むことができる由緒正しい武士であるということを示すためでもあったわけですね。

(3) 重要文化財「太刀 銘 □□国則宗 (名物 ^{ふたつ めいのりむね}二ツ銘則宗)」鎌倉時代・13世紀 愛宕神社蔵

次に、奉納刀剣の備前刀の三つ目ということで、重要文化財「太刀 銘 □□国則宗 (名物 ^{ふたつ めいのりむね}二ツ銘則宗)」です。銘が二文字読めないのですが、恐らく備前と考えられます。作者の則宗は福岡一文字派の祖です。そして、鎌倉時代初期に後鳥羽上皇が設けた御番鍛冶という制

度があり、各地から名工を招いて刀を作らせ、選ばれた刀工たちを御番鍛冶と呼ぶのですが、則宗はその筆頭格でもあります。本品は則宗の代表作の一つで、二ッ銘という名前の由来は分かりませんが、足利尊氏が所持したと伝わり、足利將軍家から豊臣秀吉が手に入れ、愛宕神社に奉納しました。愛宕神社というのは京都市街の北西に鎮座する火伏の神様です。そのため、秀吉は京都を火災や戦災から守って欲しいという意味合いで愛宕神社に二ッ銘則宗を奉納したと考えられるわけですが、もう一段深掘りしたいと思います。

実はこの愛宕神社には、明智光秀が本能寺の変を起こす前にお参りしているのです。本能寺の変が成就するかどうかを占ったという伝承があります。有名な「時は今、天が下しる五月哉」という歌を読んだのもこの愛宕神社なのです。つまり本能寺の変に力を貸した神様なのかもしれません。そして光秀を倒した秀吉は天下人になっていくわけですが、光秀に力を貸した神様に自分がさらに奉納する、要するに上書きすることによって自分が天下人である、織田信長の正しい継承者である、ということを示そうとした、そういう可能性も考えられるのではないのでしょうか。

(4) 岡山県指定重要文化財「大太刀 法光」文安4年(1447) 吉備津神社蔵

そして、奉納刀剣の備前刀の四つ目、岡山県指定重要文化財「大太刀 法光」は、通常の太刀より格段に大きな大太刀です。次の写真をご覧ください。大太刀法光は私の前職である岡山県立博物館に寄託されており、定期的に展示されています。人間の大きさと比べたら、その巨大さを分かっていただけるかと思いますが、全長3メートル77センチもある、全国最大級の大太刀です。冒頭で日本一の大太刀ってご存知ですかって話がありましたけど(※ 主催者あいさつ)、この大太刀法光は実際に大太刀が武器として使われて



大太刀法光の展示作業

いた室町時代以前のものとしては全国最大級です。江戸時代以降も大太刀は作られており、この大太刀法光より大きい大太刀はあるのですが、実際に大太刀が武器として使われたのは室町時代までで、江戸時代以降の大太刀は奉納のために作られた実用性を失ったものがほとんどです。一方で、この大太刀法光は実戦で使えるように作られています。地鉄の鍛えも刃文の焼入れもきちとなされており、武器としての機能を持っています。そしてバランスを見てください。刀身に対して茎が長いですよ。普通の太刀を拡大しただけでは、こういうシルエットにはならないのは分かっていたかと思いますが。通常の太刀のバランスと比べて茎が長い、つまり長い柄によってしっかり両手で握る、あるいは2人掛かり3人掛かりで持って振り回す、そういう戦い方に対応できるように作られているということです。目釘孔も3つ等間隔に開いていて、がっちりと柄と茎が固定できるように配慮がなされています。

奉納刀剣は基本的に未使用という話を先ほどしましたけれども、この大太刀法光も未使用で、ほぼ作られた当初の姿のまま現存しており、重量は約11キログラムあります。全体が錆びたいわゆる錆び身の状態で見られ、研磨によってかつての輝きを取り戻したのですが、研ぐ前は14キログラムあったと聞いております。大太刀法光を吉備津神社に奉納したのは、備中の在地武士あるいは播磨の赤松氏家臣と想定される薬師寺久用という人物であることが茎の銘文に記されています。大太刀は奉納者の願いの大きさや強さを表していますが、刀工集団の技術力を具現化したものともいえます。つまり、これだけの巨大な刀剣は一人で作ることはできません。個々の技量が高いだけでなく、刀工集団全体の総体としての技術力が高いからこそ、破綻なく作り上げることができるわけです。その意味で、大太刀法光は長船刀工の技術力、総合力の象徴であるといえます。

3 名物刀剣の備前刀

(1) 国宝「太刀 銘 備前国包平作 (名物 おおかねひら 大包平)」平安時代・12世紀 東京国立博物館蔵

名物刀剣の備前刀の一つ目は、国宝「太刀 銘 備前国包平作 (名物 おおかねひら 大包平)」です。この大包平は備前刀だけでなく、日本刀の代表格ということで知られる名品中の名品です。私自身も今、東京国立博物館の刀剣担当研究員ですので、定期的にこの刀を拝見し、展示し、取

扱う機会があるわけなのですけれども、見るたびに感動しますね。完全無欠というのは、こういう刀のことをいうのでしょうか。力強い太刀姿、地鉄の綺麗さ、刃文の冴え、全てにおいて満点です。完璧というのはいくつかのことをいうのだろうなと。人間に例えるなら大谷翔平みたいな刀です。非の打ちどころがないですね。そして、この大包平は古備前と呼ばれる初期備前刀工の一人、包平の代表作であり、恐らくは彼の生涯の最高傑作だと思いますが、由来伝来が岡山藩主池田家伝来となっています。特に初代藩主の池田光政のお気に入りということで、代々の池田家藩主に伝えられた伝家の宝刀であります。

大包平の名の由来は、包平の作ということからなのですが、大というのは単に大きいというだけではないのです。雄大とか偉大という意味合いが込められています。ビッグじゃないのです、グレートなのです。そういう刀の造形に対する敬意がこの名には込められています。

そして、先ほど池田光政の愛刀と言いましたが、それがよくわかるのが「池田光政日記」という、池田光政自筆の日記ですね。林原美術館に所蔵されているのですが、今、林原美術館で開催されている展覧会（※ 開館 60 周年記念展「みんなで選ぶ、林原美術館名品総選挙」会場：林原美術館、会期：2024 年 10 月 1 日～12 月 15 日）で、これからお話しする大包平が出てくる場面がちょうど開かれて展示されているので、興味がある方は見に行ってみてください。

池田光政日記の中の記録で一番古い大包平の記録というのが、「慶安 5 年（1652）2 月 16 日の条、三左衛門具足着初めの覚」というところです。三左衛門というのは、光政の息子の綱政のことです。「具足着初め」という武家の子が初めて甲冑を着る儀式があるのですが、池田綱政の具足着初めの時にあつえられた刀剣が列記されています。

慶安五年二月一六日条

三左衛門具足着初之覚

一、朝、三左と祝申候、

大兼平太刀

助真之刀

国光ノ脇指

遣、其後御影三ふくせう香仕候事、(後略)

「池田光政日記」岡山県指定文化財 江戸時代・17世紀 林原美術館蔵

この儀式で3口の刀剣が飾られるわけですね。そして、その3口の筆頭に挙げられているのが大包平です。「兼」の字が違うのですが、間違いなく大包平のことです。このように、池田家の刀剣の中で筆頭に位置付けられているわけです。そして、名物大包平と呼ばれているように、この大包平は享保名物帳に掲載された名物刀剣です。その享保名物帳にどのように記されているか紹介します。

大包平 銘有 長サ弐尺九寸四分 無代 松平大炊頭

寸長ク大キナル故名付 表裏樋有之

「名物帳」江戸時代・18世紀 東京国立博物館蔵

読みますと、大包平、銘あり、長さ2尺9寸4分、^{むだい}無代。無代というのがポイントなのです。値段がつかないという、要するにプライスレスというものです。金額がいくらと示せるものじゃないよ、ということです。松平^{おおいのかみ}大炊頭、これが池田綱政のことですね。名の由来として、寸長く大きなゆえ名付くとあります。そして^{ひょうり}表裏に^ひ樋これありというふうに、名称、寸法、評価額、所持者、そして名前の由来、特徴、そういったことが列記されています。

次に紹介するのが、大包平が江戸時代に岡山藩主池田家で保管されていた時の刀箱です。戦後、池田家から国が大包平を購入し、そして東京国立博物館に引き継がれるわけですが、その時にこの刀箱に収められていたということです。もちろん普段展示することはない、収蔵庫の中にしまわれているのですが、いかに大包平が池田家にとって重要なものだったかということをよく表しているので紹介します。刀が入る箱ですから、細長いですね。大包平って、バーンと張り紙がありますね。その下がポイントです。門外不出とありますね。まさにその通りで、大包平っていうのが池田家にとって門外不出の名刀であったということがよくわかるということです。



太刀（名物 大包平） 出典：ColBase (<https://colbase.nich.go.jp/>)

(2) 重要文化財「太刀 銘 □忠（名物 ^{うすみどり ひざまる}薄緑／膝丸）」鎌倉時代・13世紀 大覚寺蔵

次に紹介するのは、重要文化財「太刀 銘 □忠」です。銘が1文字読めないなので、□にしています。鎌倉時代・13世紀の作とみられ、京都の大覚寺様の所蔵品です。この太刀は、清和源氏の重宝、薄緑／膝丸であるという伝承をまっています。薄緑／膝丸は、清和源氏を確立した ^{みなもとのみつなか}源満仲 という平安時代中期・10世紀の武将が、異国から招いた刀工に作らせた2口の太刀のうちの一つと伝わります。この2口の太刀は、源氏を勝利に導く存在として、源氏の嫡流に受け継がれていきます。そして、様々な由緒や ^{れいいたん}靈威潭によって名が付き、そして名を変えていく存在なのです。

薄緑はもともと膝丸と呼ばれていました。それは罪人をこの太刀でもって試し斬りした時に、首を切ったら膝まで切れて、すさまじい切れ味だったということで膝丸という名がつけられたのですが、その後、清和源氏に受け継がれていく中で、蜘蛛の化け物を切ったので ^{くもきり}蜘蛛切、鳴き声を上げたので ^{ほえまる}吼丸、というように名を変えていきます。そして源平合戦の折に、源義経が新緑の季節に熊野で手に入れたことから薄緑と改名し、義経を勝利に導いた不思議な力を備えた太刀として伝わったものです。その伝承通りであれば、この太刀は異国の刀工が平安時代に作ったものということになるのですが、実物の姿形をものとして見ていくと、鎌倉時代の備前刀の特徴が顕著です。

ちょっと宣伝になりますが、先ほど申し上げたように、薄緑／膝丸は源満仲が作らせた2口の太刀の一つですが、もう一つの太刀には鬼切丸／髭切という名が付けられました。その

伝承をもつ太刀を、京都の北野天満宮様がお持ちです。この2口は源氏の兄弟刀とも呼ばれていますが、これが2口揃って初めて東京で展示される展覧会が、来年の1月21日から東京国立博物館の大覚寺展（※ 開創 1150 年記念 特別展「旧嵯峨御所 大覚寺一百花繚乱御所ゆかりの絵画一」会場：東京国立博物館、会期：2025 年 1 月 21 日～3 月 16 日）で実現します。機会がありましたら、ぜひ見に来ていただきたいと思います。

話を戻しますと、実はこの薄緑／膝丸の伝承を持つ刀剣は、この大覚寺のもの以外にも何口か複数あります。どれかが本物で、どれかが偽物なのか。恐らくそうではなく、どれもが本物なのです。どういうことかという、それぞれの刀剣がもつ優れた造形により、この刀ならきっと源氏の重宝、薄緑／膝丸に違いないということを所持者が考え、そして薄緑／膝丸の伝承がその刀に宿った結果、複数の薄緑／膝丸が存在するのだと考えています。名刀というものは、伝承とか、由緒とか、伝説とか、そういったものが宿る存在ということです。

(3) 国宝「太刀 銘 長光（名物 津田遠江長光）」鎌倉時代・13 世紀 徳川美術館蔵

そして名物刀剣の備前刀の三つ目、国宝「太刀 銘 長光（名物 津田遠江長光）」です。こちらは備前刀の最大流派である長船派を確立した名工長光の代表作です。長光の代表作としては、東京国立博物館にあります大般若長光もよく知られていますが、今日はあえて、こちらの津田遠江長光を紹介したいと思います。

がっしりとした刀身に、いかにも長光らしい華やかな刃文を焼き入れた名品ですが、この津田遠江長光の名の由来、これがまさに名物刀剣の面目躍如といえいいのでしょうか、刀剣というのが武家にとっていかに象徴的なものであったかということをよく教えてくれるのです。この長光の太刀はもともと織田信長が持っていたと伝わります。そして次の所持者が津田重久という武士なのですが、この人物は遠江守という官職を得ていたので、それにちなんで津田遠江守長光と名付けられました。

この津田重久は、いわゆる腕に覚えのある一騎当千の強者で、その腕を見込まれて明智光秀にスカウトされます。そして、本能寺の変に加わり、安土城を攻めています。その手柄によって光秀からこの長光の太刀を拝領するのです。そして御存知の通り、光秀は豊臣秀吉に敗れます。重久は高野山に逃げるのですが、腕の立つ武士を有力者は放っておかないので

すね。秀吉は重久をスカウトするのです。そして、重久は豊臣秀次の配下になります。その後、秀次が色々あって切腹することになり、また浪人になるのですが、またスカウトされるのです。次にスカウトしたのが、加賀藩主の前田利長です。こうして加賀藩士になった重久は、恩義を感じたのか津田遠江長光を前田家に献上します。その後、前田家から徳川將軍家へ献上され、さらに徳川將軍家から御三家の尾張徳川家に下賜されます。

このように、名刀というのは武将の間を、あるいは武家の間を行き交うのです。そしてその時にこの太刀は津田遠江重久という凄腕の武士が所持したものだという武勇伝が語られ、武家の象徴となって受け継がれていく、そういう存在なのです。

(4) 国宝「太刀 無銘一文字 (山鳥毛)^{さんちようもう}」鎌倉時代・13世紀 備前長船刀剣博物館蔵



太刀 無銘一文字 (山鳥毛) 附 黒漆打刀 (上杉拵) 瀬戸内市

そして名物刀剣の備前刀の四つ目、これは皆さん御存知ですね。国宝「太刀 無銘一文字 (山鳥毛)^{さんちようもう}」です。^{うえすぎこしらえ}上杉拵と呼ばれる^{くろうるしうちがたな}黒漆打刀が付属しています。この山鳥毛は、よく知られている通り、上杉謙信、景勝の愛刀である「御手撰三十五腰^{おてせん}」と通称される名刀の一つです。山鳥毛という名は、山鳥の羽毛のような非常に華やかな刃文に由来するといわれます。実際に、私は前職（岡山県立博物館）でこの山鳥毛を 15 年間手入れしたり、展示したり、間近に見せていただきましたし、東京国立博物館に移りましてからも名立たる名刀たちを見てきましたが、その中でも刃文の華やかさでは山鳥毛がやはりナンバーワンですね。

作者の銘はないのですが、その作風から福岡一文字派の作と考えられます。恐らく先ほど紹介した日光一文字と同様に、奉納あるいは献上するためにあえて銘を入れなかったのだ

と想定しています。実はこの山鳥毛、名前が付いているので名物刀剣のカテゴリーにはなりません。しかし、先ほど話した本阿弥家がまとめた享保名物帳には載っていないのです。これだけの名刀ですから享保名物帳には絶対載るはずですけど載っていない。つまり本阿弥家が知らなかったということなのですね。これはどういうことかということ、上杉家が秘蔵していたからです。江戸時代を通じてまさに門外不出、外部には誰にも見せなかった。上杉家の家宝、魂として秘蔵していたから、本阿弥家ですらその存在を知らなかったのです。

国宝『上杉家文書』という上杉家伝来の古文書の中に、「上杉景勝腰物目録」という上杉景勝の愛刀リストがあります。最初に、「上ひざう」(上秘蔵)として10口の刀剣が列記されており、その一つに「山てうまう」(さんちょうもう)が挙げられており、山鳥毛が上杉家秘蔵の刀剣であったということが分かります。このように、武家の重宝として秘蔵された名刀のことを御家名物といいます。まさにその典型例がこの山鳥毛ですね。

ここからちょっと思い出話というか、私の個人的な告白をお話しします。かつて山鳥毛は個人の方が所有されており、岡山県立博物館に寄託され、私が担当学芸員だったのですが、上杉謙信ゆかりの新潟県上越市が購入を発表しまして、上越市に譲渡されるというのがほぼ既定路線になったのが2017年4月の頃です。その時、岡山県立博物館で山鳥毛を展示したところ、「上杉家の愛刀 岡山で見納め？」という見出しで、全国紙の記事になったのです。そんな雰囲気の中、私は展示担当学芸員として作品解説(ギャラリートーク)をしました。小さな展示室に100人くらいのお客様が集まってくださいました。もう展示室が一杯で、前のほうの人は座って、後ろのほうの方は立ち見で聞いていただきました。私はこの山鳥毛がいかに素晴らしいか、岡山にとっていかに大事な刀なのかということ、熱弁を頑張って振るったのですよ。45分くらい喋りました。こういう名刀ですけど、上越市に行くかもしれませんね、みたいな最後はしみりとした話になったわけですが、話し終えてふと見上げると、所有者の方が来てくださっていたのです。この展示解説が効いたのかどうか分かりませんが、そこから風向きが変わりました。上越市への譲渡の話が撤回されたのです。そこから先は御承知の方が多いと思いますが、瀬戸内市が購入に名乗りをあげ、クラウドファンディングが立ち上がり、皆様のお力により瀬戸内市の所有になったわけです。そして今では「山鳥毛が未来を照らす瀬戸内市」というキーワードで「山鳥毛里づくりプロジェクト」

が続けられています。まさに山鳥毛が瀬戸内市の宝、瀬戸内市だけでなく岡山の宝、日本の宝になったということです。

4 注文打の備前刀

(1) 重要文化財「太刀 銘 備前国長船住左衛門尉藤原朝臣則光 於作州鷹取庄黒坂造 鷹取勘解由左衛門尉菅原朝臣泰佐打ス之 長禄参年己卯十二月十三日」長禄3年(1459) 東京国立博物館蔵

本品の最大の特徴は55文字もある長い銘文です。「備前国長船に住む左衛門尉藤原朝臣則光が作州鷹取庄黒坂に於いて造る。鷹取勘解由左衛門尉菅原朝臣泰佐が之を打たす。長禄三年己卯十二月十三日」とあります。この銘文から、備前長船刀工の則光が、美作国の鷹取庄、現在の勝央町で長禄3年(1459)に作った刀であることがわかります。長船から勝央へ行っているのですね。そして作らせたのは鷹取庄の鷹取泰佐という人物で、菅原道真の末裔であることを主張しています。

注文打というのは、武将が名工に自分のためだけの刀を作らせた特別なものなので、やっぱり通常作と比べて出来がいい。そして、何かしら作らせた意味があります。ですので、注文打の製作意図や歴史的背景を読み解いていくのが大事であり醍醐味です。

この当時、美作の地域に力を持っていたのは守護職を争っていた播磨の赤松氏と山陰の山名氏です。そして、長船刀工たちは赤松氏とその有力家臣である浦上氏の支配下にありました。本品の製作意図と歴史的背景を理解するポイントは、この刀が作られた時期(1459年)です。この時期に赤松氏が復権するのです。嘉吉の乱(1441年)で室町幕府六代将軍の足利義教を赤松満祐が殺害するのですが、それによって赤松氏は一旦没落します。その後、赤松氏の遺臣たちが、三種の



太刀 銘 備前国長船住左衛門尉藤原朝臣則光 於作州鷹取庄黒坂造 鷹取勘解由左衛門尉菅原朝臣泰佐打ス之 長禄参年己卯十二月十三日
出典：ColBase
(<https://colbase.nich.go.jp/>)

神器のうちの勾玉を南朝方から取り戻したことで、赤松氏の再興が室町幕府から許されます。それが長禄の変（1457年）です。つまり赤松氏が再び美作の地域に勢力を取り戻す、そのタイミングで鷹取泰佐は長船則光を招いて刀を作らせ、長い銘文を刻ませているのです。それは自分が鷹取庄を代々実質的に支配してきた菅原朝臣の血脈であるという、鷹取庄における自らの権益を主張するため、そして長船則光を鷹取庄に派遣してもらうことで赤松氏と浦上氏との関係再構築を図るためではなかったかと考えています。

(2) 「短刀 銘 備州住長船勝光、長享二年九月日 御陣作之」長享2年（1488）備前長船刀剣博物館蔵

そして、注文打の二つ目です。銘文に「備州住長船勝光、享保二年九月日、御陣で之を作る」とあるこの短刀は、刀身に剣と不動明王を表す梵字が彫られていて、全体の作風からも注文打であることが分かります。そして、御陣でこれを作るとというのがポイントです。この御陣というのは何なのかというと、室町幕府九代将軍の足利義尚が六角氏征討のために近江に出兵して鈎の陣という陣所を設けます。そこに長船刀工達が派遣されて刀を作ったことが、『蔭涼軒日録』に記録されています。

『蔭涼軒日録』

長享二年八月廿二日条

(前略)

三条与三郎話云、一昨日、長船長光宗光一党、自備前上洛、凡六十員、千草鉄廿駄、人数百人許有之。蓋依鈎之御所尊命、自浦上方召上之云々

(後略)

長享二年九月廿一日条

(前略)

乃出御陣。在御対面所。備州長船勝光宗光鍛冶飽見之。

(後略)

「長享2年8月22日の条には、長船勝光・宗光一党が備前の国から上洛した、60人ほどいた、千草鉄20駄を100人ほどの人夫に持たせていた、浦上氏が遣わした」と記されています。勝光・宗光ら長船刀工60人ほどが、千草鉄という兵庫県で採れる質の良い鉄を20駄、大体刀剣200口分くらいを用意して、浦上氏の命によりやってきたということです。

そしてもう一つ、同じ長享2年9月21日の条には、「対面所において備州長船勝光・宗光の鍛冶の様子を將軍義尚が飽きるほど見る」と記されています。將軍義尚自らが勝光・宗光ら長船刀工の刀作りの様子を飽きるほど見たということです。持ってきた材料は高々200口分です。鉤の陣には数万の軍勢がいたといわれているので、そこで武器を調達しようとしたのではありません。むしろ、赤松氏の政治的パフォーマンスの意味合いが強いと考えられます。この時期、赤松氏が復興するといいましたが、赤松政則が備前・播磨・美作の守護に任命され、赤松氏は最盛期を迎えます。守護代の浦上氏を通じて、將軍のもとに長船刀工達を招いて刀作りのパフォーマンスをさせることで復活を内外にPRした、その時に作られたのがこの短刀ということです。

(3) 重要文化財「刀 銘 備前国住長船次郎左衛門尉勝光 子次郎兵衛尉治光 一期一腰作之 佐々木伊予守」室町時代・16世紀(1510~20年代)乃木神社蔵

そして注文打の備前刀の三つ目です。「備前国に住む長船次郎左衛門尉勝光と子次郎兵衛尉治光が一期一腰の之を作る。佐々木伊予守」とあります。本品は長船刀工の勝光と治光の親子が佐々木伊予守のために作った注文打で、一期一腰というのは一世一代の出来の刀剣である、という意味です。刀身には剣に絡みついた龍(俱利伽羅龍王)、すなわち不動明王を彫り表して、武神が所持者を守護するという意味が込められています。佐々木伊予守とは出雲の戦国武将尼子経久のことです。製作年代がないのではっきり分かりませんが、尼子経久が伊予守の官職を獲得するのが1510~20年代、16世紀初頭といわれていますので、おそらくその頃で間違いありません。尼子氏は出雲守護代の家柄で、出雲守護は京極氏です。その京極氏から尼子経久が守護権を実力で獲得したのが、まさに16世紀初頭で、その頃から伊予守を名乗るようになります。こうしたことから、本品は出雲の守護権を獲得したこと、そして伊予守を任官したというのを記念して、尼子経久が依頼したものと

考えられます。

(4)「薙刀 銘 備前国住長船次郎左衛門尉藤原勝光 同与三左衛門尉祐定 為宇喜多和泉守 三宅朝臣能家作之 永正十八年二月吉日」永正 18 年（1521）個人蔵

そして、注文打の備前刀の四つ目が、「備前国に住む^{おきふねじろうきえもん}長船次郎左衛門尉藤原勝光と同じく^{よそうぎえもん}与三左衛門尉祐定が^{うきたいずみ}宇喜多和泉守三宅朝臣能家の^{かみよしえ}為に之を作る。永正十八年二月吉日」と銘文に記された薙刀です。所持者は^{うきたいずみ}宇喜多和泉守能家です。宇喜多能家は、岡山を代表する戦国武将である宇喜多直家の祖父で、宇喜多氏が歴史の表舞台に出るきっかけを作った人物です。能家の孫が直家、その子が秀家ということになります。能家が長船勝光・祐定にこの薙刀をつくらせたのにも、やはり理由があったと考えられます。この当時、宇喜多能家が仕えていた備前守護代の浦上氏が守護の赤松氏から備前国の支配権を実力で奪い取るのですが、宇喜多能家はその主力として戦っています。そして同じ頃、宇喜多能家は和泉守という官職を名乗るようになります。おそらくは主君浦上氏の備前国掌握、そして和泉守任官を記念して、この薙刀を作らせたのではないのでしょうか。

そしてもう一つのポイントが、この薙刀の刀身にある^{ほくんせいのけん}破軍星劍という彫刻です。破軍星というのは、陰陽道で北斗七星の中の一つです。北斗七星は北極星の方が鍵の手になっていて、星が連なっています。その先端にある星が破軍星で、陰陽道では破軍星を背にして戦うと必ず勝つという吉祥の星なのです。つまり、この薙刀は前線で戦う武士がもつ武器ではなく、一軍を率いる大将のもとにある旗印のようなもので、この薙刀が背後にある限り、我々は絶対に勝つ、勇気を持って戦えという、必勝のシンボルとして作られたのがこの薙刀だと考えられます。

まとめ 日本刀と備前刀の存在意義と瀬戸内市

まとめに入ります。

日本刀と備前刀の存在意義と瀬戸内市ということで、日本刀というのは、日本人の精神、美意識、本質を具現化した日本文化の象徴の一つであるということです。そして、備前刀は日本刀の王者といえます。誰が知っているのかというと私が知っているのですが、備前刀と

いうのは日本刀を代表するブランドであり、王者であるわけです。

そして、瀬戸内市は備前刀の生まれ故郷であり、備前刀は瀬戸内市の歴史と文化の象徴として、世界に誇り得る宝物であるということで、私のお話を終わりにさせていただきたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

(2024年12月7日(土)講演)

歴史講演会

2024年12月7日(土)

ゆめトピア長船

主催 公益財団法人 瀬戸内市歴史まちづくり財団、瀬戸内市

歴史講演会 講演録

宝物になった備前刀 — 奉納刀剣、名物刀剣、注文打 —

講師 佐藤 寛介

発行日 2025年1月

編集・発行 公益財団法人 瀬戸内市歴史まちづくり財団
岡山県瀬戸内市牛窓町長浜 5092

TEL 0869-24-7788 FAX 0869-24-7008

